

「都市化」の概念分析

——1950年代から1970年代日本の都市社会学を事例として——

東京大学大学院 宮地俊介

1 目的

本報告は、50年代から70年代までの日本の都市社会学における「都市化」概念を「何が都市と認識されてきたのか」という観点から辿るものである。都市社会学ではアイデンティティ上の危機が繰り返し論じられてきた。これに対して松本(2003)は、それ自体複雑な「都市」を対象としているのだから、アイデンティティになど拘らず関心を社会学全体へと開く必要性を喚起した。松本の先駆的な問題提起に従うためには、これまで社会的な対象として何が「都市」と認識されてきたのかを反省的に描き出すことによって、今後どのようにその可能性を広げていけるのか考察しなくてはならない。幸い社会学には多くの理論史・調査史が残されているから、今最も求められているのは、これら成果が切り開いた視座を生かしつつ理論や調査「以前の」都市認識を社会学者がどのように行ってきたのか歴史的に位置づけていく作業だと考える。

2 方法

一方で日本で都市社会学がディシプリンとして確立したのは50年代に都市化を迎えてのことであり、他方で学会成立(1982年)という制度的成功を後押ししたのは60年代から70年代にかけての都市化であった。故に都市化が都市社会学にとって重要であることは疑いえないが、これらを概念的に整理する試みは未だなされていない。従って、具体的な方法としては、都市化を中心トピックとする著書や論文をデータに用いて概念分析と整理、考察を行った。例えば倉沢(1959)や奥田・高橋・副田(1975)、61年の日本社会学学会シンポジウム「都市化の理論」での議論などである。

3 結果

分析の結果、四半世紀の間でも同じ都市化という概念でもって何がそのように認識されてきたのかは大きく変化していることが分かった。紙幅の都合上、代表的なものだけを簡単に紹介する。50年代以降、一方で都市化研究ではL.Wirthのアーバンイズム論を彫琢しながら、人口増加がもたらす生活様式の変化等が論じられていくが、他方で農村部では人口減少を伴う生活様式の都市化が論じられることなども承け、それまで人口を主流としてきた論者の都市化概念からも説明変数としての人口が抜け落ちていく。これ以降、農村部も含めて社会全体が都市化していくと論じられるようになり、次第に「都市型」社会というカテゴリーが用いられるようになる。

4 結論

ここで重要なのは、それまでの都市社会学においておよそ異なる内容や対象が同じ都市化という概念で論じられてきた事実である。以上の検討からは、社会学者が何を都市や都市的なものと認識してきたのか、その変遷を明確に読み解けるし、このような反省的視座はこれからの都市社会学が何を新たな対象として組み込んでいけるのかを考察する一つの貢献たりうると考える。

文献

奥田道大・高橋優悦・副田義也、1975、『都市化社会と人間』日本放送出版協会

倉沢進、1959、「都市化と都会人の社会的性格」『社会学評論』9(4):p.33-52

松本康、2003、「都市社会学の遷移と伝統」『日本都市社会学年報』2003(21): p.63-79